

土佐のわらべ

第407号《第429回（2015. 9. 10） 子どもの本の読書会記録》参加者7人・文書参加5人

『王への手紙 上下』 岩波少年文庫

トンケ・ドラフト／作 西村由美／訳 岩波書店

遠い昔、まだ騎士達がいた頃、大山脈の東にあるダホナウト王国と、大山脈の西にあるウナーヴェン王国の物語である。

ダホナウト市に近い丘の上の礼拝堂で五人の若者が騎士叙任式の前夜を寝ずに過ごしていた。一番若いティウリは、明日騎士になれると思いながら黙想していると、「神の御名においてドアを開けよ」という声があった。このような時に、声をきかなくてはならないのだろうかためらい、しかし、心を決め、ドアを開けた。ドアのむこうにいた男は、白い盾の黒い騎士に手紙を渡してくれとティウリに頼む。ティウリは、その騎士をやつとすることで見つけたが、彼は瀕死の重傷を負っていた。虫の息で騎士は、この手紙と指輪をウナーヴェン王に届けてほしいと言い、ティウリは騎士の名誉にかけて、王に手紙を届けるという任務をひきうける。

ウナーヴェン王に手紙を渡すまで、いろいろな危険にあうティウリ。大山脈を越える時、道案内の少年ピアックと出会い、二人は助けあいながら目的地にむかうのだった。

この本は上下巻あるので大変だったと思うけれど、内容が素晴らしいので、私は一気に読めた。ティウリとピアックの友情、冒険、少年たちの純な心、また、まわりの大人達のすてきなこと、そして、ティウリと父親が再会した場面は心を打たれた。

いい本は、時代が変わっても読者をひきつける。

私がこの本を読みたいと思ったのは、『クララ先生、さようなら』の中で、クララ先生が最後に子ども達に読み聞かせた本だから。『王への手紙』の続編『白い盾の少年騎士』も、是非おすすめしたい。

読書会のみなさまの感想は、「いい本に出会えてよかった」「面白くて面白くてガンガン読め、こんなに夢中になれた本はひさしぶりで、読書の楽しさを存分に感じさせてくれました」

作者トンケ・ドラフトはオランダの作家で、第二次世界大戦中、三年間、家族とともにインドネシアの日本軍の収容所で過ごす。1962年に『王への手紙』、1965年に続編の『白い盾の少年騎士』を出版した。1976年に「青少年文学のための国家賞」を受賞。2004年『王への手紙』は、オランダで「金の石筆賞」を受賞した過去五十年間の本の中で、第一位に選ばれている。

(Y.A)